桂古流・桂流（かつらこりゅう・かつらりゅう） 杉田 康（すぎた こう）

花材／ニシキギ、シマハラン

当流では古典より現代造を指導教授しています。

小原流（おはらりゅう） 君村 玉水（きみむら ぎょくすい）

花材／しだれ柳、桜、八つ手

小原流の歴史は、19世紀末、初代家元小原雲心が盛花の形式を発表しました。水盤に花をいける様式。華道の代表的流派。全国に150支部、海外に62支部を持ち、伝統文化の振興に力を注いでいます。気軽にいけばなを楽しめるよう、21世紀に合わせた「カリキュラム」を作成するなど、積極的な活動をします。

古流松東会（こりゅうしょうとうかい） 芳埜 理鳳（よしの りほう）

花材／松、キウイ、カキツバタ

江戸時代中期に創案された「生花」という「様式美と理念」の継承と、より現代の生活様式に合った「現代花」の研究を含め、我が国固有の文化「華道」の普及に努めています。

桂古流（かつらこりゅう） 新藤 華盛（しんどう かせい）

花材／シンパク、ツツジ

桂古流は江戸末期に桂離宮華務職の養真斉白龍により創始されました。三世池華叟は旅をしながら修行を続け浦和を家元本部としました。昭和28年六世家元新藤華盛が埼玉県で初の財団法人のいけばな教室を設立。平成29年には創流150周年を機に九世家元新藤華浩は二代目新藤華盛を襲名しました。

池坊（いけのぼう） 青木 孝雄（あおき たかお）

花材／キササゲ、ウンベラータ、キンコーボク、ヤマニシキギ、メラルーカ、ポポー、ラン、ヘレコニア、ブルーキャッツアイ

室町の中期、平安京の只中、六角堂からいけばなの歴史が始まり555年続いています。

古い歴史を持つ池坊ですが、代々生活環境の変化に対応した花形や新しく生産される花材に適応しながら不易と流行を繰り返し進化してきました。

花と人のいのちの対話の中から一瞬の輝きを大切に……を永遠の命題にしています。

■いけばなの歴史

いけばなの起源は６世紀ころに僧侶が仏に花を供えた儀式が始まりといわれています。もっとも古い流派は、室町時代中期に京都六角堂の僧侶により創立された池坊です。

１６世紀末には茶道の流行とともに「投げ入れ」と呼ばれる形式が主流となり、江戸時代中期にかけて家元、宗家によって「立花」というスタイルが作られました。

さらに、江戸時代中期から後期にかけて、新しく「生花（せいか）」と呼ばれる形式が誕生します。このスタイルは「立花」をよりシンプルにし、全体を３本の線で作られた三角形に表現するようにしたものです。それまでの上流階級や武家階級のものだったいけばなは、庶民のたしなみとして広がり、多くの人々に愛されるようになります。

江戸時代以降、多くの流派が生まれ、現代いけばなの形式が創出されました。そのひとつ小原流では盆栽の要素を取り入れ、浅い花器に縮小された景観を表現する「盛花」形式を生み出しました。また、昭和初期より活動し、終戦直後の日本にいけばなで力を与えたのは、草月流の流祖勅使河原蒼風です。